

## 中国黒龍江省における朝鮮族住居・集落の調査

建造物研究室

**鏡泊湖と朝鮮族** 吉林省の牡丹嶺に水源を発する牡丹江は、いちど溶岩台地の谷間にせきとめられ、そこから再び北流して松花江に合流する。その溶岩台地の谷間にできた湖は、水面が鏡のように美しいので、「鏡泊湖」とよばれる。この湖名は満州語のビルトン（<sup>ビルトン</sup>）を漢語訳したものという。

鏡泊湖から北東へ10kmほどのところに、渤海という小さな鎮（<sup>まち</sup>）がある。いうまでもなく、あの渤海国の渤海で、その近郊には有名な上京龍泉府の宮殿遺跡もある。平城京の從兄弟（<sup>いと兄弟</sup>）のようにして栄えた渤海国の都であり、渤海以後も、女真や満州族などのツングース系の人びとが、この地に勢力をほこった。ところが、近年では朝鮮族の人口もずいぶん増えてきている。清朝は当初、漢族をはじめとする一切の異民族の東北三省入植を厳禁していたが、嘉慶年間〔1796-1820〕あたりから、秘かに越境する朝鮮人が増えてきた。中国に越境し開墾する朝鮮人は、はじめ「朝耕暮帰」とか「春來秋去」とよばれる漂泊的な耕作民だったが、しだいに長期的な居留者（<sup>じりゅうしや</sup>）に変わり、事実上の入植が進行した。とくに同治八年〔1869〕の大飢饉によって、李氏朝鮮北部の人びとが大挙して豆満江をわたり、吉林東南部へ移住した。これより先、禁令を破って中国へ逃れる朝鮮族は数しれず、日韓併合時代から朝鮮民主主義人民共和国成立後も増加の一途をたどり、入植の足跡は黒龍江や遼寧にまでおよんでいる。現在、朝鮮族の総人口は約200万人という。

**瀑布村の成立と構成** 鏡泊湖の周辺に住む人びとも、大多数が朝鮮族である。わたしたちが調査したのは、「吊水樓」という瀑布（<sup>たき</sup>）の落水をうける溪谷（<sup>たに</sup>）に営まれた村落であった。その名も瀑布村。行政的には寧安市に属する。朝鮮半島の出身地はさまざまだが、ある老人は、1920年代に忠清北道提川郡白雲面徳洞里からやってきたと語った。かれらの最初の移民先は、吉林省境により近い鹿道（<sup>ルダウ</sup>）という村であった。文化大革命直前の60年代前半になって、寧安政府は、鏡泊湖方面の開拓を奨励し、鹿道村から瀑布村への移住が進められた。70年代にはいると、牡丹江の水力発電化事業がはじまり、村内3ヶ所に発電所が建設された。しかし、かえって灌漑用水の不足をまねき、瀑布村から鹿道村へ逆もどる一家も増え、人口は減っていったという。近年は、鏡泊湖の開放にともなう観光業の発展により、村は再び活気をとりもどしつつある。このように瀑布村は、成立年代の新しい朝鮮族の村落である。しかし、その住居は、寧安市の他の朝鮮族村落と比較しても、圧倒的に古式をとどめており、台地上から眺める集落の全景は、瀑布や溪谷の風景とあいまって美しい。また、丸屋根の草葺き民家は、すでに韓国でもほとんどみられなくなっており、十分調査に値すると判断した。

瀑布村（二道村）の民家群。寄棟風の丸屋根と直線切妻屋根が共存している。

（二道村）の屋根伏図

瀑布村は3つの小地区に分かれており、調査した集落区域はかつて二道村とよばれた。溪谷の西側斜面に33軒の住居（P<sub>01</sub>～P<sub>33</sub>）と材木小屋（P<sub>34</sub>）1棟、機械小屋（P<sub>35</sub>）1棟が一見ばらばらに配置されている。しかし、集落の中央を南西から北東へ流れる小川の兩岸で、家屋の配列は異なった規則性を示す。すなわち南東側では、東西棟を主屋とする屋敷が整然とならぶ一帯が中心にあり、計画的な建物配置をみせるのに対し、北西側では等高線に即した自然発生集落風の配列が認められる。なお、集落の東を限るのはダムであり、北端にはレンガ造の水力発電所も建設されている。

**瀑布村の民家** 上に示した35の木造建造物およびその付属舎は、すべてが草葺きである。草葺きにも、切妻造直線型屋根と寄棟風むくり屋根の2種類がある。葺材はヨモギがいちばん良いが、ほかにもアシや羊草を使う。ここでは、パースを示した金成男氏宅（P<sub>08</sub>）を例にとってみよう。P<sub>08</sub>は寄棟造・大壁構造の平屋建物で、1960年代に建造された。金氏一家は鹿道からの入植者だが、もともとこの家に住んでいたわけではない。2年前まで台地上に新居をかまえていたのだが、それを売却すると同時に、P<sub>08</sub>を借家して住むようになった。一家は30代の夫婦と子供3人の5人暮らしである。主屋は寄棟造の典型的な2室タイプで、2つの部屋を3枚引戸で間仕切りしている。西側の部屋は、竈をはさんで土間とオンドル部分にわかれている。竈まわりの土間をとくにブォック（釜屋）とよぶこともある。竈の焚口部分は、土間が一段低く、竈穴のようにになっている。この場所をブォガンという。竈には羽釜をのせる穴が3つあけてあり、そのうち1つにだけ羽釜が据えられ、他の2つの穴は釜の蓋をひっくりかえしてふさいでいた。夏に竈の火を焚くことはほとんどない。オンドルが熱くなるからである。かつて夏には、庭の外竈で炊事することが多かった。今では、電気炊飯器や電熱器が普及しており、もっぱらそれらで調理する。この部屋のオンドル部分は、チョンジーもしくはアレバンという。ここにちゃぶ台をだして食事する。食事のないとき、ちゃぶ台は畳んで壁にたてかけておく。夜は寝室にもなる。引戸をへだてた奥のオンドル部屋は、ウバンという。この奥の部屋は寝室で、タンスや机をおいている。チョンジーとウバンの前面には、幅1mほどの土間の通路がとおる。本来オンドルとは、部屋全体をあたためる床暖房装置であり、このような通路を屋内に設けることはなかった。近年、オンドルを造りかえるさい、従来のオンドルを約1m切り縮めて通路とする傾向がみられるのは、おそらく部屋の一部の床を暖房する漢族や満州族の炕の影響があるのだろう。

竈穴住居から発展した朝鮮族の民家は、まずブォックとオンドルが一体化した1室型平面から出発したものと推定される。瀑布村の民家は、この原初的平面にウバンを加えた2室型で、やはり朝鮮族住居の祖型にちかいものとみてよからう。朝鮮半島では、瀑布村よりも発展した平面の民家が多いよ

うだが、咸鏡道や平安道には類似する平面をもつ民家も存在するようであり、今後はより広域的視野から瀑布村民家の系譜を考えていきたい。なお、本調査は芸術文化振興基金助成の「伝統的文化財技術の調査研究」の一環としておこなったものであり、奈文研からは村田健一と浅川が参加し、これを楊昌鳴（天津大学）、栗原伸治（同）、坂田昌平（京大大学院）が補佐した。（浅川滋男）